

前置詞繰り返し構造再考

三 谷 恵 子

1. 先行研究と本稿の目的

ロシア語史の中で前置詞繰り返し (повторение предлога) として知られている構造がある。前置詞句内の構成要素に、同じ前置詞が繰り返し付与される構造で、古代から中世ロシア語のさまざまな文献に見られる (Историческая Грамматика 159-61; Булаховский 404-05 他多数)¹ — на грамотахъ на всѣхъ ярославлихъ 「すべてのヤロスラフの証書に誓って」 (Лет. Новг. I. л.112); Мьстислав же поиде к воротомъ к воднымъ. 「ムスチスラフは水門へと進んだ」 (Лет. Ипат. л.213)。

この構造は文献資料と非文献資料の双方に現れる。先行研究の指摘によれば、文献資料では年代記 (Истрина 1919: 146 他), ノヴゴロド白樺文書や各種の実用文書 (Янин, Зализняк 153-54; Зализняк 145-46; Борковский 232-311), А. ニキーチンの『三つの海の彼方への旅行記』や長司祭アヴァクムの自伝のような個人の著作, 歴史叙事詩や物語 (на рѣцѣ на Каялѣ тьма свѣтъ покрыла 「カヤーラの川辺に闇は光を覆った」イーゴリ軍記; о похвальных сихъ о нынешнихъ повѣстехъ 「現下の, この賞賛の物語について」ザドンシチナ) など広い範囲に実例が分布するが, 特に 13-16 世紀の実用文書に多く見いだされる。一方いわゆる“教会文章語文献”には例がほとんどない。また, 17 世紀後半以後では一部の公文書や請願書で使用される他は, 文献の種類によらず例は減少する。非文献資料では, ブィリーナや哀歌, 民話などの口承文芸, 方言にも同様の構造が見られ, 特に北方地域に由来するものに顕著であるとされている (Евгеньева 22ff; Черных 289; Гринкова 92 ff; Мансикка 142)。

以上の指摘を総合し, 文献資料, 非文献資料に現れる諸例を連続的現象とみなせば, 前置詞繰り返しは「古いロシアの民衆の言葉の特徴 особенность народного древнерусского языка」(Черных 289) とすることができる。Miklosich (252-53) や Потебня (296-98) は他のスラヴ語の例も示し, これが共通スラヴ語に遡る特徴であると示唆している。しかし例えば Филин は,

三谷恵子

例が現れる文献の時代や、方言分布のあり方から考えて、共通スラヴ語にまで起源を遡ることに根拠はないという (Филин 510-12)。

なぜ繰り返しが起こるのかについては、要素、特に後置された形容詞などの強調あるいは対照焦点化の効果を主張する立場 (Борковский 232 ff; Борковский, Кузнецов 453; Гринкова 98) と、少なくとも実用文献における前置詞繰り返しには、単に同じ前置詞句の構成要素であることを示す句標識以上の意味はないとする立場 (Историческая Грамматика 161; Worth 496; Янин, Зализняк 153-54) がある。

これらの先行研究の指摘とそこに含まれる問題点を念頭に、本論では特定の文献に現れる前置詞繰り返し構造を整理し、ついでその特徴を、最適性理論 (Optimality Theory) の枠組みを援用しながら解釈する。本論は、前置詞繰り返し構造のロシア語史における位置付けを目的とするが、同時に、この構造の分析を、ロシア語の変遷を考えるためのひとつの材料として提示することも意図している。

2. 前置詞繰り返し構造のパターン

2. 1. 資料と調査

前置詞繰り返し構造の特徴を明確に把握するため、中世ロシアの実用文書として重要な資料的価値を持つ以下の2点から、重点的に例を集めた。

- A. 『大ノヴゴロドとプスコフの文書 Грамоты Великого Новгорода и Пскова』 (以下 ГВНП)
- B. 『14-16 世紀の大公ならびに分領公の遺言状と条約 Духовные и договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв.』 (以下 ДДГ)

先行研究では、種々の文献からの例が示されているが、特定の文献を取り上げた時にこれがどの程度多用される構造なのか、またそこに語彙的特徴はないのか——例えば、特定の語彙要素を含む場合に顕著に生じるといったような——などの具体的な事柄は必ずしも明確に指摘されていない。² そこで、この構造が次の3節に述べるような一般化可能な議論の対象であるかどうかを確認するため、ДДГ、ГВНПの文書類での前置詞繰り返しの出現度、また前置詞句内の語彙要素の特徴を調べた。その結果、以下の判断を得た。

①前置詞繰り返しは、例外的に起こるといような構造ではない。本論では原資料を提示する紙面的余裕がないので、一定量の文書を個人のコンピュータ

前置詞繰り返し構造再考

に入力しコンコーダンスソフトにかけた結果の一部を数値だけで示す。

ГВНП: No.136 他, Двина で作成された個人の文書の場合

総語数 1857

前置詞の総出現回数 283

前置詞繰り返しに関わる前置詞の総数 63

ДДГ: No.61 モスクワ大公ワシーリィII世の遺言状 (1461-62) の場合

総語数 2635

前置詞の総出現回数 405

前置詞繰り返し構造に関わる前置詞の総数 74

②繰り返される前置詞や繰り返しが起こる名詞句内要素の語彙に際立った偏りがあるとは考えられない。同じ語彙を含む前置詞句でも、繰り返しが生じる場合と生じない場合がある。例えば ГВНП No.116 に

А задовъ тои земли от Сосницы от рѣчки да в вѣтъ в Сосницкую в ручей, по ручью
вверхъ до...

土地の領界はソスニツァの流れからソスニツァ川の支流の小川へ, 小川に沿って上流へ
да в черной лѣсѣ, из лѣса в Сосницкую вѣтъ в ручей, и по ручью
さらに広葉樹林へ, 林からソスニツァ川の支流の小川へ, そして流れに沿って

という2つの例があり, 語順は異なるが語彙は同じである。ГВНП, ДДГ 全体では, 特定の語彙を含む決まったパターンでもっぱら現れるという主張は退けられる。ただし繰り返しの起こり方には一定のパターンがある。これについては 2. 2. で言及する。

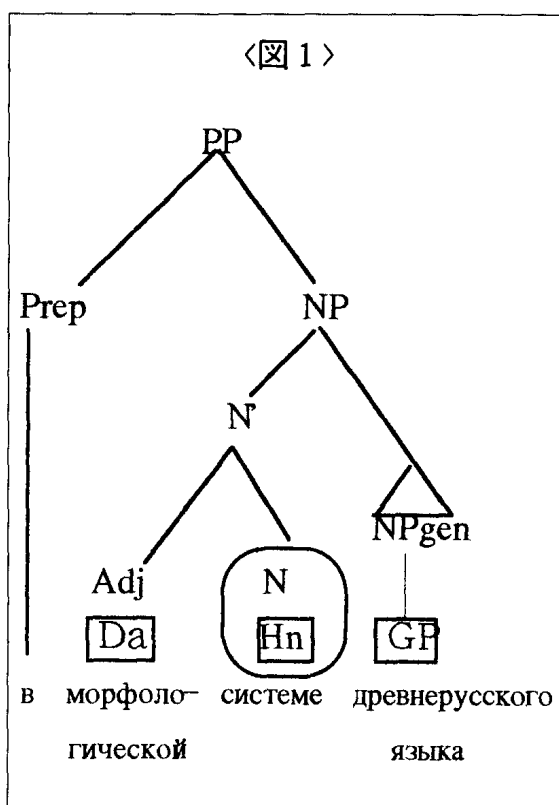
③前置詞繰り返しが強調, 対照を表すという主張は積極的には支持できない。例えば上の②に示した2例を比較して, 前者のほうが後者に比べ「(他でもない) ソスニツァ河の支流」であることを強調しなければならない文脈的必要性があるとは思われない。また Worth (496) などが指摘しているように, ко мнѣ к вашему брату к молодшему ко князю к Василью къ Ярославичю 「私, あなたの弟であるワシーリィ・ヤロスラヴィッチ公に」(ДДГ 45) のように, 同一指示対象に言及する同格名詞も含め1つの前置詞句の要素である7語の中の6語に繰り返しがある場合, それらのすべてに強調, 対比等の意味があるとはとうてい考えられない。2. 2. で述べるように, 繰り返しと名詞句内要素の語順には関係があるが, この事実と強調の問題は同一視すべきではないだろう。

以上のことを総合して, 前置詞繰り返しは, 1つの前置詞を主要部とする前

置詞句内の要素であることを示すための単なる句標識であり、例えば通常の名詞句で主要部名詞に対して従属要素の形容詞が一致を示すのと同じレベルの、統語構造上の標識付けの現象ととらえられる。強調の意味は“ない”と否定するものではないが、調べた資料の範囲では少なくとも積極的な要因と考える理由は見いだすことができなかった。

2. 2. 構造のパターン

まず、前置詞句の構成について確認しておく。今、現代ロシア語 в морфологической системе древнерусского языка のような、主要部名詞



системаとこれに一致する限定辞 морфологическ(ая), 不一致型限定辞 (生格名詞句) から成る前置詞句 PP の句構造を標準的な階層構造で示せば、左の〈図 1〉のようになるだろう。N Hn は主要部名詞, NP 内の Adj Da は主要部に一致する従属限定辞 (形容詞, 指示代名詞, 所有代名詞, 所有形容詞), NPgen GP は生格名詞句を表す。

これに対し現下の考察対象の資料のロシア語では、NP 内の要素の語順は現代語より遥かに柔軟で、従属部要素は主要部に対し後置も前置もされる。複数の従属部が主要部をはさんで両側に置かれることもある。GP

が Da と Hn の間に挿入されることもある。こうした構造にどのような階層構造を考えるかは別問題なので、ここでは実際に表現される前置詞句の配列を、下の〈形式 1〉のように、平面的に示す。{ } は要素が現れうることを、 $\triangle_{GP}$ は GP が挿入されうることを意味する。

〈形式 1〉

PP: prep [_{NP} [_{N'} {Da} **Hn** {Da}]] { [_{NP} GP] }

$\triangle_{GP}$ $\triangle_{GP}$

これにあてはまる例を具体的に文書から取り出せば、

前置詞繰り返し構造再考

prep	[_{NP} △ _{GP}	[_{N'} {Da}	△ _{GP}	Hn	{Da}}	{[_{NP} GP]]}
к		своеи		отчинѣ		
	自分の世襲領地に					
по		докончалной нашеи		грамотѣ		
	我々の合意文書に従い					
по		отца твоего		грамоте		
	汝の父の証書に従い					
къ		своему		брату	старейшему	
	自分の兄に					
по		душевнои		грамотѣ	отца твоего	
	汝の父の遺言状に従い					
по		сеи жалобалной Великого Новгорода		грамотѣ		
	この大ノヴゴロドの嘆願書によって					

などとなる。従って、前置詞繰り返しは上記のような構造の前置詞句内の（先頭の要素を除く）任意の要素の前で起こると仮定できるわけだが、文書では実現されるパターンとそうでないものがある。以下に例をまとめる。

(1) Hn が単一名詞で、これに一致型限定辞 Da が 1 つ従属するタイプ。

(1a) **pHn pDa** の例：ис портѣ из моихъ 「我が衣装の中から」(ДДГ 1)；А исъ судовъ исъ серебряныхъ далъ есмь 「銀の器の中から私は与えた」(ДДГ 16)；на отцѣ на моемъ и на мнѣ 「私の父と私のために」(ГВНП 110)；из свинеи из моихъ Самуилъ дайте боровъ лутьшии 「私の豚の中から一番大きな去勢豚をサムイルに与えよ」(ГВНП 105)；про землю про концальскую 「区（コネツ）の所有地のために」(ГВНП 112)

(1b) **pDa pHn** の例：調査の範囲で例なし。

(2) Hn に一致型限定辞が 2 つ従属するタイプ。語順の組み合わせによって 7 通りのパターンが可能だが、例が見出されたのは (2a)–(2d) のパターン。

(2a) **pHn pDa pDa**：ис конь изъ своихъ из ѣздныхъ велѣлъ есмь дати 「自分の騎馬用の馬から私は与えるように命じた」(ДДГ 3)

(2b) **pHn Da pDa**：съ братомъ своимъ съ старѣшимъ с Даниломъ 「自分の兄ダニロと」(ГВНП 2)

(2c) **pDa Hn pDa**：в правую меру в новгородскую 「ノヴゴロドの規定枡（メーラ）で」(ГВНП 114)；по отцви души по Сидорови 「父のシドルの安息のため」(ГВНП 169)

(2d) **pDa pDa Hn**：по сеи по данои грамоте 「この贈与状に従って」(ГВНП 280)；за меншии за свои дѣти 「年下の我が子らのために」(ДДГ 56)

三谷恵子

- 一方/pDa Da pHn/, /pDa pDa pHn/, /pDa pHn pDa/となる例は見つからなかった。
- (3) GPを含むタイプ。GP一つがHnに従属する要素である場合や、(1)(2)のような一致型限定辞とともに句を構成する場合など、様々な組み合わせが考えられるが、実際に見出されるパターンは以下のものである。
- (3a) **pGP pHn** : i то приказываю <...> по отца моего по владенью по старымъ грамотамъ i по дѣлнымъ грамотамъ же 「我が父の領土と、古い証書また分配状に従って <...> 命ずる」(ГВНП 144)
- (3b) **pGP pDa Hn** : по дѣда своего по данои грамоте Федорове и по рукописанью 「祖父のフョードルの贈与状と書付に従って」(ГВНП 144)
- (3c) **pGP Hn pDa** : по отца моего князя великого грамотѣ по душевной 「我が父大公の遺言状によって」(ДЛГ 4) ; по отца моего рукописанью по Олександрову 「我が父のオレクサンドルの書付に従って」(ГВНП 144)
- (4) 主要部名詞に同格の名詞句が続く場合、同格名詞句の各要素の前で繰り返しが起こる。資料で際立って多い。上記(1)–(3)のパターンと組み合わせられて様々な構成をなす。
- (4a) 人に関する句で
- 人名のみ : купили <...> с Васильемъ с Олексѣевичемъ 「ワシーリイ・オレクセイヴィッチとともに買い上げ」(ГВНП 314)
- 称号+人名 : за княгинью за Марьею 「公妃マリアに」(ДЛГ 4)
- 親族名詞+人名 : съ старешимъ его братомъ съ Юрьемъ 「彼の兄ユーリと」(ДЛГ 61) ; съ сыномъ с моимъ с Васильемъ 「我が息子ワシーリイと」(ДЛГ 89)
- 親族名詞+称号 : при моемъ отци при великомъ князи 「我が父大公において」(ДЛГ 24)
- 人名+親族名詞 : у Ивана у Софьина сына у Маноилова внука 「ソフィアの息子、マノイルの孫であるイワンから」(ГВНП 314)
- 親族名詞+称号+人名 : къ своему брату к молодшему ко князю к Василью къ Ярославичю 「自分の弟ワシーリイ・ヤロスラヴィッチに」(ДЛГ 56)
- (4b) 土地、川、町などに関する句で
- 普通名詞+普通名詞 : в моеи Отчинѣ в великомъ княженьи 「私の世襲領地である大公領で」(ДЛГ 56)
- 普通名詞+固有名詞 : на мохъ на Пехкѣи 「ペフケイの沼地に」(ГВНП 38)

2. 3. パターンのまとめ

名詞句の構造すなわち従属要素のタイプや数、語順などはさまざまだが、2. の(1)から(3)に共通して、主要部名詞以外の要素の前で前置詞が繰り返されるという特徴が見て取れる。中でも(1a)は最も多く見られるパターンで、多

前置詞繰り返し構造再考

くの先行研究において「被修飾語の後ろに置かれた修飾語の前でしばしば前置詞が繰り返される」と指摘されたものである。(4)の名詞句は固有名詞や同格要素を含む点で(1)から(3)までと若干異なるが、先頭の名詞を主要部、後続する要素を同格的限定辞と見なせば、繰り返しの起こり方は(1a)のパターンに還元することができるだろう。そこでこの“主要部名詞の前では繰り返しが生じない”という特徴を前置詞繰り返しの原則と仮定して、次の3節の考察の基盤としたい。ただし(3a)の場合は主要部の前で繰り返しが起きており、この原則に一致しない。しかし本論筆者が調べた資料の範囲では、後置された主要部名詞に繰り返しが起こるのは2例で、その1つが(3a)に例示したもの、同じパターンでもう1例あったのみである。そこで、これは例外として扱い、なぜこのパターンが起こるのかも後に考察することとする。

3. 前置詞繰り返し構造の解釈

3. 1. 最適性理論の適応

社会言語学的に言えば、言語(L)には、時代、地域、階級、位相差などの諸因子をパラメータとするさまざまな変種がある。2節で調べたような、13-16世紀の実用文書類の言語も、汎時的言語連続体(L)としてのロシア語の一変種とみることができる。すると、この変種においては、一定の規則で前置詞が前置詞句標識として付与されうる特徴があるということになる。別の変種である現代標準ロシア語や、教会文章語では前置詞繰り返しは普通起こらない。また、口承文芸テキストや一部の方言において実現される別の変種では、従属部に後続する主要部に対する繰り返しも含め、かなり自由に前置詞繰り返しが起こる。³ そこで、この関係を統語論的な現象として統一的に説明することを、最適性理論の基本的な考え方を援用して試みる。

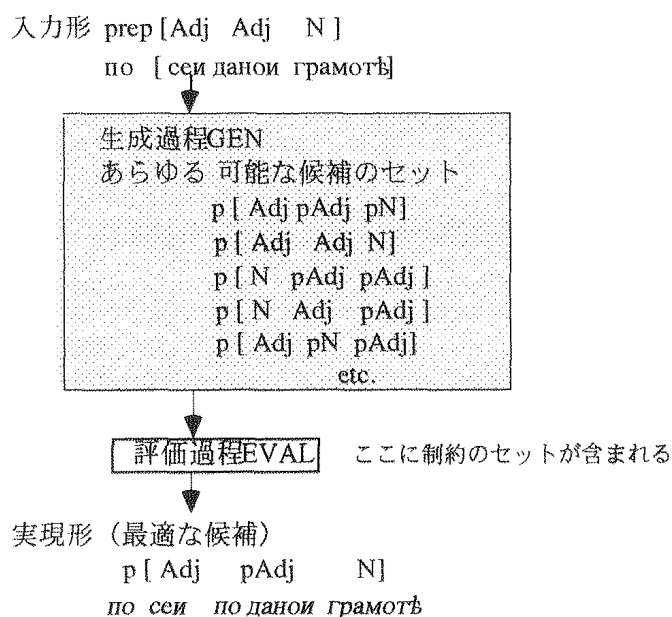
最適性理論(O[ptimality]T[heory])の基本概念は「言語(普遍文法)は違反可能な制約の集合 a set of violable constraints から成り、個別言語の文法の特徴は、それぞれの言語が固有に持つ、それらの制約の序列関係 ranking of those constraints」(Archangeli & Langendoen 11)であるという形で表明される。『普遍文法』の妥当性についての議論はさておき、ここではこの考えをもとに、上で述べた言語(L)とその変種の間を次のようにとらえることとする。

三谷恵子

言語 (L) の文法は違反可能な制約の集合から成り、その変種 (言語 (L) の個別の実現形) の文法の特徴は、個々の変種が固有に持つ、それらの制約の序列関係によって成立する。

OT のモデルは 〈図 2〉 のようにイメージされる。

〈図 2〉



制約の集合は、評価過程 EVAL(uation) として想定されるプロセスの中に含まれ、入力形 (input) から生成過程 GEN(erator) を経て生成されるあらゆる可能な形式から最適なものを選び出す。従って、言語 (変種) 間の違いを明らかにするには、**評価過程 EVAL** に含まれる制約の内容と、個別言語 (変種) におけるその序列を定めることになる。

では前置詞繰り返しの場合、どのような制約を考えればよいか。まず OT で一般に指摘される、あらゆる可能な候補を導き出す際に考慮すべき忠実性 **Faith(fulness)** の制約がある。これは次のように表すことができる。

Faith : 入力形に何も付加せず、何も除去するな

前置詞句内での前置詞繰り返しは明らかに余剰効果なので、そのような余剰

前置詞繰り返し構造再考

性のない形式を基本の入力形と考えることは妥当と考えられる。これにより

по [купная грамота Иванова]

⇒ а) по купной грамотѣ Иванови

のように、繰り返しのない、通常の前置詞句が生成される。もしこの制約が、他の違反可能な制約より優位にあれば、前置詞繰り返しのない変種（現代標準ロシア語、教会文章語）のパターンが得られる。一方、前置詞繰り返しが生じるためには、次のような制約が必要であろう。

MarkP : PP 内名詞句の先頭以外の任意の要素に句標識（前置詞句の標識）を付与せよ

ここで「先頭以外」としたのは、名詞句内の先頭の要素に句標識を付与する形：под [князь великий] ⇒ *под под князем под великим のようなパターンはロシア語のいかなる変種でも許容されないので、これを排除するためである。

今、**MarkP** を **Faith** より優位（より重要）な制約として適応させると、可能な繰り返しのパターンとして得られるのは：

по [купная грамота Иванова]

b) по купной грамотѣ по Иванови

c) по купной по грамотѣ Иванови

d) по купной по грамотѣ по Иванови

である。このうち、主要部名詞 грамота に句標識が付与された c), d) のパターンは 2. 3. で定めた原則からの逸脱である。そこで、このパターンを不適切な候補として排除するために、さらに次の制約を設定する。

HeadNoMark : PP 内名詞句の主要部に句標識を付与するな

HeadNoMark ≧ **MarkP** (**HeadNoMark** は **MarkP** より優位 [より重要]) とすれば、**HeadNoMark** に違反した c と d は、これに違反していない b に比べ「より適切でない候補」となって脱落する。つまり、制約の序列関係を

HeadNoMark ≧ **MarkP** ≧ **Faith**

とすれば、先に指摘した資料での前置詞繰り返しのパターンが最適候補として選ばれることになる。このことを、最適性理論の標準的な表記に従って示すと〈図 3〉のようになる。

三谷恵子

〈図3〉

	HeadNoMark	MarkP	Faith
a) по купной грамотѣ Иванови		*	
a b) по купной грамотѣ по Иванови			*
c) по купной по грамотѣ Иванови	* !		*
d) по купной по грамотѣ по Иванови	* !		*

*は、最上段に示したそれぞれの制約に違反した形式であることを、!は重大な違反（実現されない形式）であることを示す。ここから c), d) は候補として排除される。a), b) はともに、**HeadNoMark** より序列の低い（重要でない）制約に違反しているが、その場合には、より序列の低い制約 **Faith** に違反している b) の方が適切な候補として選択される。

一方、c), d) のように主要部名詞に前置詞繰り返しを許容する構造は、**MarkP** が **HeadNoMark** より優位に位置付けられることで最適な候補となる。一部の方言や、口承文芸のテキストがその基盤としていられると考えられる民衆言語（e.g. во славноѣм во городе во Киеви 「名高き町キエフで」）で見られるのはこのパターンである。結局、前置詞繰り返しを許容しない変種 var1.（教会文章語文献、現代ロシア語）、現下で問題としている場合のように、主要部以外の要素の前で繰り返しの起こる変種 var2.、自由に前置詞繰り返しの起こる変種 var3. の違いは、3つの制約の序列の違いという形に還元され、〈図4〉のようにまとめられる。

〈図4〉

制約の序列				
var1.	Faith	➤	HeadNoMark	➤ MarkP
var2.	HeadNoMark	➤	MarkP	➤ Faith
var3.	MarkP	➤	HeadNoMark	➤ Faith

本論で問題とする前置詞繰り返しのパターンを実現させる var2. は、余剰な前置詞句標識の付与が起こるという点で var3. の特徴と共通するが、句標識の現れ方に制限が加えられるという点では var1. に接近しており、統語論的に

前置詞繰り返し構造再考

var1. と var3. の中間的構造になっている。ところで一般に、口承文芸や方言は言語の古層を写すとしばしば指摘される。この考えを適応させれば、var3. の制約序列は古いロシア語において可能であった前置詞句のパターンを示しているということになるだろう。一方、現代語の標準形は var1. のパターンである。すると var2. は、var1. の制約序列のパターンのみがロシア語の可能な形式として定着する中で、かつてあった var3. のセットが一部変化した形で顕在化したもの、つまり史的变化における中間性でもあると見ることができるのである。もちろん、これらの史的変遷を反映する序列のセットは、相互排他的に順次生じて来たというものではなく、言語共時体の中に共存してきたものと理解しておく必要がある。実際、前置詞繰り返しが見られる文献で、すべての前置詞句に同じパターンで繰り返しが起こるわけではないし、var2. の中に var3. のパターンが混入することもある。2. 3. で例外扱いとした、主要部に前置詞句標識が付与されるケースもまさにここに該当するものであろう。

3. 2. 前置詞繰り返しの消失について

前置詞繰り返しは本質的に余剰な句標識付与である。従ってそれが維持されるべき強い必然性を持ってはいなかったと考えれば、消失は通時的变化の必然であったのかもしれない。しかしここではいま 1 つ考えられる因子として、語順の固定化を指摘しておきたい。

先の〈図 4〉の var2. の規則を、主要部名詞に従属部が 1 つ付与されたタイプの名詞句に適応すると、実現されるのは **pHn pDa** (из свинеи из моихъ) であった。ここに var1. のパターンを追加すると、可能なタイプは

a) из свинеи из моихъ, b) из свинеи моихъ c) из моихъ свинеи
の 3 通りとなる。ところで、現代ロシア語への標準化の中で、名詞句の構造は 2. 2. の樹形図で示したような **[[Da-Hn]-GP]** という比較的安定した語順を獲得した。この語順（ならびに階層構造）では、主要部が先頭に来る a), b) のような構造は回避される。その結果残るのは c) の、前置詞繰り返しが起こる可能性のない形式となる。つまりこの **[[Da-Hn]-GP]** という語順の安定化が前置詞繰り返しの生じうる機会をせばめ、前置詞句において前置詞繰り返しが生じにくくなる可能性を高めたのではないだろうか。そうした中で、2. 2. で示した(4)のパターンだけが請願書や官公庁の文書において一種の“書式”になって近代に至るまで使用されたと推測することができる。17 世紀の風刺物語『ヨルシュ・エルショヴィッチの物語』の冒頭部分にはこの状況がよく示さ

三谷恵子

れている⁴ — Жалоба, господа, нам на Ерша на Ершова сына, на щетинника на ябедника, на вора на разбойника, на ябедника на обманщика, на лихую, на раковые глаза, на острые щетины на худово недоброво человека.

4. 展望 — 前置詞繰り返し構造が示唆するもの

Н. Толстой はロシア語文献の通時的特徴と類比させて古セルビア文献のジャンルわけを行い、それをピラミッド型モデルで表した (Толстой 206)。そのモデルを、ロシア語史で用いられている文献ジャンルわけ⁵と照合しつつ、改めて古代から中世にかけてのロシア文献の区分に適応させてみたのが〈図 5〉である。図の右側には 3 節に示した制約の序列を加え、最上段の **Faith»HeadNoMark»MarkP** から右下への矢線、ならびに最下段から右上に上昇している斜線は、3. 1. の最後に述べたような、変種の共存の状況をイメージしている。

〈図 5〉



このおおまかな図が言語の事実とそれほど違っていなければ、ДДГが代表する世俗的法文書 (Светско-юридическая литература) や、ГВНПが属する実用文書 (Деловая письменность) などのジャンルの上下に連なるジャンルのテ

前置詞繰り返し構造再考

クストにも **HeadNoMark** ≧ **MarkP** ≧ **Faith** の序列を持つ変種が共存するはずである。このように考えれば、古代から中世の年代記や世俗的物語（上の図では「歴史文学 Историческая литература」や「物語文学 Повествовательная литература」に属する）などに見られる散発的な例，A. ニキーチンの著作に見られる例，⁶あるいは民衆の日常言語をより反映したと推測される白樺文書に現れる多くの例などはいずれも，〈図5〉にイメージした変種の競合した言語状況を反映したものとして理解されることになるだろう。

先行研究の中には，前置詞繰り返しを本来スラヴ語に存在したもの，言い換えればスラヴ語の基層に求める立場があった。事実，Miklosich, Потебняらが指摘したように，他のスラヴ語の口語的表現ジャンル，例えば古セルビア語にも前置詞繰り返しが見られる例を見い出すことができる（На убаву на польу Косову「美しきコソヴォの原で」；А на онай на равной Ресави「あの平らかなレサヴァに」：Потебня 299 — 例は Караџић, Пјесме）。また例えば，ボスニアで14世紀に記された文書⁷には，ロシア語のそれとよく似た前置詞繰り返しのパターンが見られる。こうした資料的事実は，ロシア語以外のスラヴ語においても前置詞繰り返し構造があったことを示唆しているように思われる。もちろん，限られた資料からただちに，前置詞繰り返し構造が共通スラヴ語にまで遡る現象であったという“結論”を主張するものではないが，ロシア語文献に見られる前置詞繰り返し構造は，それを媒介として，文字言語成立以前のスラヴ語の姿を我々が垣間見るための，ひとつの手がかりであるように筆者には思われるのである。

（みたに けいこ・京都大学）

資料

Духовные и договорные грамоты великих и удельных князей XIV-XVI вв. М.; Л.: АН СССР, 1950.

Грамоты великого Новгорода и Пскова. М.; Л.: АН СССР, 1949.

文献

Борковский, В. И. 1949. *Синтаксис древнерусских грамот. Простое предложение.* Львов: Львовский государственный университет.

Борковский, В. И.; Кузнецов, П. С. 1963. *Историческая грамматика русского языка.* М.: АН СССР.

Булаховский, Л. А. 1958. *Исторический комментарий к русскому*

三谷恵子

литературному языку. Киев.

Гринкова, Н. П. 1948. “Некоторые случаи повторения предлогов в кировских диалектах.”

Язык и мышление 11. 91-103.

Древнерусская грамматика XII-XIII вв. 1995. М.: Наука.

Евгеньева, А. П. 1963. *Очерки по языку русской устной поэзии в записях XVII-XIX вв.* М.; Л.: АН СССР.

Зализняк, А. А. 1995. *Древне Новгородский диалект.* М.: Язык русской культуры.
Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Простое Предложение. 1978. М.: Наука.

Истрина, Е. С. 1919-21. “Синтаксические явления Синодального списка 1-ой Новгородской летописи.” *Изв. ОРЯС* 24, 26. 1-239.

Мансикка, В. 1912. “О говоре Шенкурского уезда Архангельской губернии.” *Изв. ОРЯС* 17. 2. 86-144.

Потебня, А. А. 1941. *Из записок по русской грамматике. 4: Глагол.* М.; Л.: АН СССР.

Соколова, М. А. 1957. *Очерки по языку деловых памятников XVI века.* Л.: ЛГУ.

Толстой, Н. И. 1998. “Отношение древнесербского книжного языка к древнеславянскому языку (в связи с развитием жанров в древнесербской литературе).” *Избр. труды* 2. 200-11.

Филин, Ф. П. 1972. *Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Историко-диалектологический очерк.* Л.: Наука.

Черных, П. Я. 1954. *Историческая грамматика русского языка. Краткий очерк.* М.: Учпедгиз.

Янин, В. Л.; Зализняк, А. А. 1986. *Новгородские грамоты на бересте. Из раскопок 1977-1983 годов.* М.: Наука.

Archangeli, D. and D. Terence Langendoen (eds.) 1997. *Optimality Theory. An Overview.* Blackwell.

Miklosich, F. 1926 (2nd ed.). *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen. Bd.4. Syntax.* Wien.

Thallóczy, Lj. 1906. “Istraživanja o postanku bosanske banovine sa naročitim obzirom na povelje Körmendskog arkiva.” *Glaznik Zemaljskog Muzeja u Bosni i Hercegovini* 18.4. 401-48.

Worth, D. 1982. “Preposition repetition in Old Russian.” *IJSLP*. 495-507.

注

- ¹ 本論が扱う前置詞繰り返し構造の他に、次のような等位関係にある複数の要素の前での前置詞の反復使用がある — в монастыри и в больницы и в пустыни и в темницы заключенных посѣщая 「修道院, 病院, 隠者の庵, 牢獄に閉ざされし人々を訪れ

前置詞繰り返し構造再考

よ」(Домострой)。研究者によってはこのタイプの構造も前置詞繰り返しとしてあつかっている(例えば СОКОЛОВА 111)が、これは本論の考察の対象外とする。ただしどちらも余剰に前置詞句標識を付与するという意味では関連的現象であり、その統語論的な関連性は等位接続という構造とあわせて考察する必要がある。

- ² Worth は ДЛГ のみを考察対象として取り上げている。前置詞繰り返し構造の現れ方に関しては当然、本論の分析は Worth のそれと同様の結果となった。しかし最適性理論を援用した分析と、ロシア語史への位置付けは本論独自のものである。
- ³ Мансикка は自らの調査した地域の方言では「前置詞繰り返しは全ての場合に生じる」としたが、Евгенева によれば、その主張は現実を少し単純化し過ぎだという(Евгенева 48)。彼女の詳細な研究によれば、ブィリーナ、哀歌、その他の民謡や民話、また方言において繰り返しが生じる頻度は、地域や時代でかなりばらつきがあるという。しかしそのことを考慮に入れても、Евгеньева, Гринкова らが示しているさまざまな例は、繰り返しが自由に生じる変種が存在したことを明らかに示している。
- ⁴ 出典は *Повеств о Ерше Ершовиче. Русская демократическая сатира XVII века.* М.: Наука, 1977.
- ⁵ ここでは Древнерусская грамматика XII-XIII вв. 15-16 の区分を参照した。
- ⁶ Хождение за три моря Афанасия Никитина (*Памятники литературы древней Руси. Вторая половина XV века.* М, 1982. 444-76) の全文から調査した結果、テキストの総語数 6369, 前置詞の総数が 835 で前置詞繰り返し構造の数は 26 であった。A. ニキーチンの旅行記をどのジャンルに帰属させるかについては議論のあるところかも知れないが、旅という範疇で広くとらえれば「巡礼記 паломническая литература」に関連づけることができるだろう。従ってこれもまた、図 5 の階層図の中では ДЛГ と隣接するジャンルの文献であり、共通する特徴を持つことが理由付けられる。
- ⁷ 例えばボスニアの総督トヴルトコがヴコスラヴィッチ公に宛てた 1357 年の証書。Thallóczy, Lj. 410-11.

Keiko MITANI

Reexamination of Preposition Repetition

This paper is devoted to the study of Preposition Repetition (PrRep) in Medieval Russian.

PrRep is a structure where a P(reposition), the phrasal head of a Prepositional Phrase (PP), is repeated before any component(s) of the complement noun phrase (NP) inside PP: *съ своимъ братомъ съ старѣишимъ* (*with their own brother with younger*). This structure is widely observed in Old and Medieval Russian secular texts: charters,

三谷惠子

contracts, chronicles and personal writings. PrRep is said to be abundant in oral texts like *bylina* and laments.

In the present paper two collections of documents which originated from 13th to 16th centuries are examined and the patterns of PrRep are elicited. The examples of PrRep from the examined documents reveal that there is an obvious tendency that PrRep can occur before any dependent component(s) inside NP but hardly before the head noun of NP.

Based on this observation the paper attempts to interpret PrRep in the framework of Optimality Theory (OT). OT proposes that a Grammar contains a set of violable constraints, and differences between constraint rankings result in different patterns of structure. Each constraint may be violated, but violation is tolerated only in order to satisfy a higher ranked constraint. On the ground of this assumption three constraints are maintained:

Faith(fulness): output forms must be completely congruent with inputs.

MarkP: component(s) of NP inside PP must be marked with P.

HeadNoMark: head noun of NP inside PP must not be marked with P.

In order to obtain the pattern like *сѣ своимъ братомъ сѣ старѣишимъ* where repetition occurs only before the dependent of NP as an optimal candidate, the ranking of constraints should be: **HeadNoMark** » **MarkP** » **Faith**.

By changing the ranking of the constraints other patterns of PP will emerge: PP without PrRep which is standard for contemporary Russian will be an optimal candidate if **Faith** outranks the other constraints, and PP where any component including the head N can be marked with P, a typical pattern for some dialects and oral texts, is obtained if **MarkP** occupies the highest position in the hierarchy of ranking.

It is surmised that the difference in ranking of constraints reflects the historical change of PP in Russian. The older and the more “naïve” the linguistic materials are, the more frequently evidence of PrRep is found and in more various patterns, suggesting that **MarkP** is easy to select as the highest constraint. Evidence of PrRep is less frequently in Medieval Russian secular texts, where **MarkP** is outranked by **HeadNoMark**. Finally in contemporary Russian, **Faith** has the highest ranking position and PrRep is ruled out.